

【翻訳】

ハンス・スローンと大英博物館：好事家のコレクションが国家財産に
(エドワード・P・アレクサンダー著『ミュージアム・マスター—達人たちの博物館とその影響—』より)

Sir Hans Sloane and the British Museum :

from collection of curiosity to national treasure

Edward P. Alexander 『Museum Masters — Their Museums and Their Influence』

中村 真弥* 訳

Shinya NAKAMURA

(解題)

英国が世界に誇る大英博物館のコレクションの基礎となったものは、ハンス・スローン (Hans Sloane) が収集していたものであることはよく知られており、大英博物館の歴史やその後の発展、現在同博物館が保有するコレクションなどに関する文献はよく目にすることができる。しかし、ハンス・スローンはアイルランド出身で英国王室付医師に任命されていたこと、アイザック・ニュートン (Sir Issac Newton) の次に王立協会 (the Royal Society) 会長に就任したこと、コレクションのきっかけはジャマイカへの渡航であったこと、その基となったものはジャマイカ自生の植物であったことなど、スローンの人物像や初期のコレクションについてはあまり知られていないように思われる。また、スローンは博物館の館長でも学芸員でもなかったが、コレクションを王族や貴族、研究者に公開しており、なるべく多くの人々の利用を望んで、ロンドン市内にコレクションを残すように遺言した。スローンの死後、管財人は入館の無料を主張し、それは現在まで維持されている。しかしながら、当初は入館許可を入手するために2・3回は館へ出向かなければならなかったし、一般市民は自由に観覧することが許されておらず、ギャラリー・ツアーへの参加が義務付けられていたのである。

このようなハンス・スローンの業績を明らかにするため、「ハンス・スローンと大英博物館：好事家のコレクションが国家財産に (Sir Hans Sloane and the British Museum: from collection of curiosity to national treasure)」を『ミュージアム・マスター—達人たちの博物館とその影響— (Museum Masters -Their Museums and Their Influence)』からとりあげ、日本語訳を行なった。この文献では、スローンの生涯や医師としての活動、コレクションを始める

*昭和音楽大学

きっかけ、その形成過程や内容、スローン死後のコレクション管財委員会による博物館設立に向けた活動などを詳述している。これは、デラウェア大学 (the University of Delaware) 博物館学部長やアメリカ博物館協会 (American Association of Museums) 会長を歴任したエドワード・P・アレクサンダー (Edward P. Alexander) が、1995年にアルタミラ・プレス (AltaMira Press) より出版した著作である。

日本語訳にあたって原文にはない節ごとの見出しをつけた。また、文意を明確にするために、原文に忠実な逐語訳ではなく意味を損なわない程度に文言を割愛した。原注は(1)と表記し、訳者による注は数字のみで表記した。

1. ジャマイカ赴任

1687年、アルベマール公爵¹ (the Duke of Albemarle) は総督としてジャマイカへ赴くため、共に現地へ赴任する医師を探していた。公爵は医師の推薦をピーター・バーウィック博士² (Dr. Peter Barwick) に依頼し、バーウィックは同僚のハンス・スローンに白羽の矢を立て、ジャマイカ行きについて聞いてみた。当時医者として成功していた27歳のスローンは、王立協会の会員に選出されており、王立医科大学 (the Royal College of Physicians) 研究員となるなど、将来を約束されているようなものであった。また、当時は熱帯病にかかるなど長期の航海には相当な危険が伴っていた。そのため、トマス・シデナム博士³ (Dr. Thomas Sydenham) やスローンの友人は「ジャマイカへ行くのなら、ロザムンド池⁴に身を投げた方がいい」と言っていた⁽¹⁾。

スローンはありきたりの開業医ではなく、自然科学、特に植物研究に取り組んでいた。彼は当時最も優秀な植物学者であった親友のジョン・レイ⁵ (John Ray) に相談した。レイはスローンに賛成し、「ジャマイカへの航海ならば長くて危険であろうが、君のような人間がジャマイカへ行き、その自然を徹底的に研究することを切に願う。アメリカ植物史に関する多くの発見があるかもしれない」と述べ、後に手紙で「あなたがとてつもないことをやってのけるであろうと期待している」と付け加えている⁽²⁾。

スローンはジャマイカ行きを決めたが、公爵にある条件を提示した。双方が同意したことは、「スローン博士は、西インド艦隊 (アルベマール公爵提督) 付の軍医として派遣される。艦隊の全医師はスローン博士に従わなければならない。(中略) 年俸の600ポンドは3ヶ月ごとに支払われるものとし、準備費用として300ポンドが前払いされる。また、艦隊が帰国するにあたり、博士が望むのであれば西インド諸島に残ることができる」という条件である⁽³⁾。

この契約は同意にこぎつけ、支払いが行なわれた。後にスローンは、『ジャマイカの自然史 (Natural History of Jamaica)』という二巻の大きな本を1707年と1725年に出版している⁽⁴⁾。船酔いにかかったこともあったが、艦隊が通過するたびに鳥や魚、クラゲなどを、島に停泊すれ

ば自生している樹木の観察を行なった。ジャマイカでは、現地の気象、祝祭で演奏された現地の音楽、地震や島の未開部分の調査、治療にあたった患者についての記録を残した。アルバマール公爵が1689年に死んだ時、スローンは帰国を希望した公爵の未亡人に従って英国へ戻った。その時、長さ7フィートの黄色のヘビ、イグアナ、ワニなどを連れて帰ろうとしたが、すべて帰国途上に死んでしまった。

スローンは、地域の地理、歴史、動植物、先住民の習慣と交易について綿密に調査を行なった学識ある旅行者の先駆けであった。どんな細かいことも書き留めようとしていたため、ジョゼフ・バンクス⁶ (Joseph Banks) やチャールズ・ダーウィン⁷ (Charles Darwin)、ジョゼフ・フッカー⁸ (Joseph Hooker) など英国の冒険科学者にとっては尊敬の的であった。帰国後の1696年にスローンはジャマイカのカタログ植物 (『Catalogus Plantarum quae in Insula Jamaica』)⁽⁵⁾ を刊行し、その後自然史についての本を出版した。これらの本は、スローンが実際にジャマイカの自然で見つけたものだけについて記述し、各々の短い歴史を付け加えたという点でそれまでのものとは異なっていた。

スローンは約800の植物をジャマイカから持ち帰った。ほとんどは未知の植物であり、植物標本となったり、育成されたりした。スローンは持ち前の気前のよさで、ジョン・レイのような植物学者や自分の博物館を持っていたウィリアム・チャールトン (William Charleton (Courten)), 後に庭師のジェームズ・ハーロー (James Harlow) をジャマイカへ派遣し樹木を採集させたアイルランド・モイラのアーサー・ロードン卿 (Sir Arthur Rawdon of Moira)、バドミントンの自宅の庭園に外来植物を植えていた知識豊富で熱心なボーフォート公爵夫人 (the Duchess of Beaufort) などとそれら珍しい植物を共有した。

スローンのジャマイカへの航海は、彼の長い人生において育まれる二つの才能が示されており、両方とも博物館の繁栄に非常に重要なことであった。第一にスローンは自然の物や珍しい物、人工物などを収集する徹底したコレクターになり、収集に精力と富を捧げることになる。ジョン・イーヴリン⁹ (John Evelyn) は1691年にスローンのコレクションを見学して、日記に次のように書いている。

ジャマイカの自然物が主な収集品であるスローン博士のコレクションを見に行った。コレクションは植物、果物、珊瑚、鉱物、石、土、貝殻、動物、昆虫などが卓越した判断の下に集められている。二つ折りの紙に挟まれた乾燥植物と約80種ものシダ植物や別の種類のブドウ、ジャマイカ産胡椒の枝や葉、花、実などである。博士自身の記録と哲学的な論文、観察が付属しているコレクションは、島の歴史についても記述しており、確実に内容豊富で傑出したものである⁽⁶⁾。

スローンが証明したもうひとつの持ち味はバランスのとれた金銭感覚だった。ジャマイカ行きの渡航費用の契約を有利に結んだだけでなく、ペルー産キナ皮¹⁰への投資も行なっていた。また、スローンはマラリアによるおこりや発熱の治療方法を改善し、さらに神経障害と出血のための処方を行なった。ジャマイカ人のチョコレート¹¹の使用に感銘を受け、病人用にチョコレ

ートとミルクを混ぜた飲み物を作った。「ハンス・スローン卿のミルクチョコレート」は販売の際に、「スローン卿の友人である医者が推奨」、「胃が軽くなり、肺病にも効果あり」と宣伝された⁽⁷⁾。この製品の使用料がスローンの収入となっていたと思われる。現存している1719年と1724年の会計書には、彼が毎年5・6隻の船からジャマイカ産砂糖を輸入していたことが示されているため、おそらく相当収益があったであろうことは想像に難くない。1695年、ジャマイカで出会ったエリザベス・ラングレイ・ローズ (Elizabeth Langley Rose) と結婚したためスローンは財産を大きく増やした。彼女はロンドンの市参事会員であったジョン・ラングレイ (John Langrey) の娘で相続人であり、スローンと共にジャマイカで共同研究をしていたフォーク・ローズ博士 (Dr. Fulk Rose) の未亡人でもあった。エリザベスは、ローズ博士の膨大な財産から生じる収入の3分の1を相続した。したがって、計画的で抜け目のないスローンは、自分のコレクションを永久不変のものとし、後の大英博物館の設立に繋がる独創的な遺書を通じて企業家的な手腕を発揮した。

2. スローンの生涯

ハンス・スローンは、1660年4月16日に北アイルランドのダウン州キリリー (Killyleagh, County Down) で誕生した。スコットランド系の父親 (アレクサンダー: Alexander) は税収入役でクランブラッシル伯ジェームズ・ハミルトン (James Hamilton, Earl of Clanbrassil) の補佐役、彼の母親 (サラ・ヒックス: Sarah Hickes) はウィンチェスター大聖堂 (the cathedral church of Winchester) の主教座聖堂名誉参事会員の娘であった。キリリーで学校に通ったスローンは、スタンフォード湖 (Lake of Stanford) 周辺の植物や野生生物により一層魅せられていた。後に若い時のことを「植物や自然に関する勉強がとてもうれしかったし、好奇心をもって植物を見ていた」と記している⁽⁸⁾。沖の無人島を調査したこともあったが、海鳥の産卵期だったので「卵を踏まずに歩くのはとても大変だった。海鳥が頭の上を飛びながら大きな声で鳴いていた」とも回想している⁽⁹⁾。

16歳の時、スローンは結核を患い血を吐くようになったが、節制を心がけワインとウィスキーをやめ、93歳まで生きることができた。1679年、スローンは医学の勉強のためロンドンへ行くまでに結核から回復していた。それから5年間、スローンは解剖学、医学、化学、そして植物学の講義に参加し、薬草園と病院を見学して回った。ニコラウス・スタンフォースト (Nicholaus Stanphorst) に化学を、チェルシー薬剤師協会付属薬草園¹¹ (the Physic Garden of the Society of Apothecaries in Chelsea) の管理人ジョン・ワッツ¹² (John Watts) に植物学を師事した。さらに、ジョン・レイやロバート・ボイル¹³ (Robert Boyle) と知り合いになった。

1683年の春、スローンはタンクレッド・ロビンソン (Tancred Robinson) ともう一人の学生と共に一年間英国を離れた。彼らはパリでシャルト病院 (the hospital of La Charité) に通い、

ジョゼフ・ピトン・ド・トゥルヌフォール¹⁴ (Joseph Pitton de Tournefort) に植物学を、ジョゼフ・グイッチャルド・デュルヴェニー (Joseph Guichard Durveney) に解剖学を学んだ。パリではカトリック教徒しか学位を受けることができなかったため、7月下旬にスローンはフランス南部のオランダの飛び地にあるオレンジ大学 (the University of Orange) に移籍して審査を受け、薬学の博士号を取得した。議事録によると、スローンは「平均的な身長で、髪は短く明るい栗色。長く厳かな顔には水泡の痕がある」と記されている⁽¹⁰⁾。その後、スローンはフランス南部のモンペリエ大学 (the University of Montpellier) 付属植物園へ行き、ピエール・シラク (Pierre Chirac) に解剖学と医学を、ピエール・マグノル¹⁵ (Pierre Magnol) に植物学を学んだ。1684年の秋頃ロンドンに戻り、医者として開業する準備をしていた。

ボイルは、当時一流の医者であったシデナム博士に宛てた推薦状をスローンに渡した。その推薦状では、スローンを脂の乗った研究者、優秀な植物学者、熟練した解剖学者として紹介しているが、これを読んだシデナムは「コベント・ガーデン (Covent Garden) のおぼちゃんの方が植物学をよく知っているし、解剖なら行きつけの肉屋の方が関節を完璧に解剖できる。すぐ病人の枕元へ行きなさい。病気を学ぶことができるのは、病人の枕元のみなのだ」と激怒した⁽¹¹⁾。

そのような態度にもかかわらず、シデナムはスローンに好意を持った。というのもスローンは仮説を立証するため、観察や事実に即した実験を行なうようにしていたからである。例えば、多くの医者がペルー産のキナを使わなかった。なぜならキナに含まれる成分のキニーネには解熱作用があるということが明らかであっても、当時の医学理論ではキナ皮の処方では排泄などの変化が伴わなかったからである。スローンは出血や吐き気、疱疹などの治療に使われていた薬を処方したが、「安静、節制、平穏は自然が人類に与えた最良の治療薬である」と考えた⁽¹²⁾。さらに、心身医学について考察し、ジャマイカで観察した「情熱は、特にヒステリー症の女性や心身症の男性に非常に効果がある」とも考えた⁽¹³⁾。1716年という早い時期にスローンは天然痘の予防接種を主張し¹⁶、当時のキャロライン皇太子妃¹⁷ (Caroline, then Princess of Wales) の娘の治療についてアドバイスした。

スローンの社会的で陽気な性格は患者に対する態度に表れ、医者としての成功の一助となった。彼は、すべての階層の人々と楽しく過ごすことができ、常に好意的であった。ジョン・レイとその家族に上等な砂糖を贈っていたし、ヨークシャーの植物学者、リチャード・リチャードソン博士 (Dr. Richard Richardson) に鉢植えのヤマシギをもらった返礼として何冊もの本を贈っていた。また、リチャードソン博士の元助手でサンクトペテルブルグで植物学の教授を務めていたヨハン・アンマン博士¹⁸ (Dr. Johann Amman) にも10ギニーを贈ったことがある⁽¹⁴⁾。当時、政治家や文人の社交場であったコーヒー・ハウスに通い、毎週のように同僚や学者仲間と自宅で夕食や食後の会話を楽しんでいた。

貧しい人々が午前10時前に診療所へ来れば、スローンは早起きをして無料で診察をした。1687年、王立医科大学付属薬剤室の責任者になり、貧困層に安く薬を処方していたが、論争と訴訟の末、他の薬剤師たちによって閉鎖に追い込まれてしまった。1694年、スローンは年間30ポンドでキリスト病院（Christ's Hospital）の内科医に任命され36年間その職についていたが、病院に定期的に給料を返していた。スローンはジェームズ・オーグルソープ¹⁹（James Oglethorpe）のジョージア植民地を強く支援したが、その植民地は主に圧迫され極貧生活を送らねばならなかった英国人のために計画されたものであった。スローンの患者には、ベッドフォード公爵（the Duke of Bedford）（診察料1回43ポンド）、リーズ公爵（the Duke of Leeds）、ボーフォート公爵夫人、ニューキャッスル公爵夫人（the Duchess of Newcastle）、アン女王²⁰（Queen Anne）、アン女王の夫ジョージ・デンマーク皇太子²¹（Prince George of Denmark）（診察料100ポンド）、ジョージ1世²²（George I）、キャロライン女王²³（Queen Caroline）、そしてジョージ2世²⁴（George II）など王室出身者や貴族が多く含まれていた。サミュエル・ピープス²⁵（Samuel Pepys）は、ほんの少しの時間でもスローンと話ができるので病気になるように望んでいたし、ジョン・ロック²⁶（John Locke）もまた治療薬についてスローンに相談していた。1761年、スローンは英国陸軍の軍医総監に任命され、ジョージ1世に準男爵を授けられ経歴の頂点に達した。スローンは多くの栄誉に浴した最初の医者であり、3年後に王立医学学校の校長に任命され、16年間校長を務めた。

英国国立アカデミーのひとつであり1666年に創設された王立協会におけるスローンの影響力は、自身の医療活動のおかげで次第に大きくなっていった。ジャマイカからの帰国後、スローンは王立協会の活動に参加し、1693年には書記となった。『哲学交流』の復刊を目指して、スローンは英国とヨーロッパにいる多数の文通相手から寄付を獲得した。アイザック・ニュートンが1703年に王立協会会長に就任し、スローンはニュートンと共に仕事をした。著名な地質学者ではあるが高圧的なジョン・ウッドワード博士²⁷（Dr. John Woodward）がスローンを非難したことがあった。1710年、スローンが野生のヤギの胃袋から発見された結石には解毒作用があるという内容の論文を発表しているときに、ウッドワードは侮辱的な発言をし、スローンが自分に対して険しい表情を向けたと非難した。ジョン・アーバースノット²⁸（John Arbuthnot）は何が洪面の構成要素となるかを質問し、その場の雰囲気や元に戻そうとしたが、王立協会の理事会がウッドワードの追放を決めたので論争は終わってしまった。

1727年のニュートンの死後、理事会は満場一致でスローンを王立協会会長に選出し、年次総会で3人に1人がスローンの会長就任に賛成した。未納会費を手際よく徴収してアクトンの高級不動産に投資することにより、スローンは王立協会の財政状態を改善した。彼はチェルシーの自分の土地を年間5ポンドという名目上だけのレンタル料で薬草園として王立協会に寄付し、40年もの間、薬草園で育成された50種類もの植物を寄付し続けた。81歳の時、スローンは

14年間務めた協会会長への再選を取りやめた。68年弱の会員歴において、スローンは自然史と医学に関する多くの論文を上梓し、王立協会に投稿される論文の中核分野であった数学と天文学にこの二分野を加えたのである。当時、スローンは国際的に名が通った学者として知られ、フランス、プロシア、サンクトペテルブルグ、マドリッド、ゲッティンゲンの学士院会員に選ばれた。

1742年、スローンは人生に幕を下ろそうとしていた。妻のエリザベスは1724年に亡くなっており、継娘および2人の娘はすでに結婚していた。彼は1712年以来チェルシーを領有しており、30年後の1742年、現在のブルームズベリー（Bloomsbury）にあった邸宅を離れることに決め、チェルシーのマナー・ハウスに自分の巨大なコレクションと共に移住した。

3. スローンとコレクション

16・17世紀において西欧での珍奇な物を収集しようとする情熱は凄まじいものであった。世の中とその動植物について説明する手段として観察という行為が信頼度を増してくることでより科学的興味を惹き起こし、各地のコレクションに新たな価値が見出された。英国では、ふたりとも優れた庭師であったジョン・トラDESCANT父子²⁹（John Tradescant the Elder, John Tradescant the Younger）が、ロンドン郊外南ランベス（South Lambeth）の自宅に1629年、珍しいものを収集した部屋を開設した。それは「トラDESCANTの方舟（Tradescant's Ark）」として知られ、手入れが行き届いた庭に囲まれていた。1656年、トラDESCANTの息子が、飼育していた鳥や動物、魚、昆虫、鉱石、宝石、果物、彫刻、削り屑、絵画、武器、衣装、家庭用品、コイン、メダル、植物、灌木、樹木などが掲載されたカタログを出版した（『トラDESCANT・ミュージアム（Musaeum Tradescantium）』）。トラDESCANTの息子の死後、アマチュア科学者でコレクターだったエリアス・アシュモール³⁰（Elias Ashmole）がそのコレクションを引き継ぎ、自分のコイン・コレクションを付け加えて1683年にオックスフォード大学へ寄贈した。彼は大学に施設を建造させ、アシュモリアン博物館とした¹⁵。

別の有名なコレクションは、ロンドンのウィリアム・チャールトンのコレクションで1648年頃設立された。チャールトンは父親が経済的困難に陥っていたため、自分の姓であるコートンを放棄して一時的に国外で生活していた。スローンとチャールトンは仲のいい友人であった。ジョン・イーヴリンは、1686年の日記にチャールトンのコレクションについて記している。

サンダーランド伯爵夫人（the Countess of Sunderland）と連れ立ってミドル・テンプル（the Middle Temple）のチャールトン氏のコレクションを見に行ったが、外国旅行でも、王族や貴族のものでもこれほどのコレクションは見たことがなかった。そのコレクションは、細密画、素描、貝、昆虫、メダル、自然物、動物（そのうち100個くらいはアルコール漬けになっていた）、鉱石、器、琥珀に入れられた珍奇な物、水晶、瑪瑙などが含まれていた。その種の中では珍しい物で申し分ないものであった。特に鳥、魚、花、貝に関する本には緻密な絵と生態が描かれていた。このチャールトン氏のコレクションは、氏自身が

ヨーロッパ諸国を旅行して集めてきたもので、8,000ポンドの価値があるであろう⁽¹⁶⁾。

スローンはジャマイカへ渡航する前から、英国やフランスで乾燥植物などを収集していた。帰国に際し、頑丈な書籍や大きな書類を用いて乾燥植物の体系的な標本集を作り始めた。今日、英国自然史博物館植物部門が所蔵するこれら337巻の標本集は、「おそらく17世紀末から18世紀初頭にかけて作られたもっとも広範囲な単一の植物学コレクション」であり、リンネ式植物分類法が用いられた基準標本として歴史的にも重要である⁽¹⁷⁾。

植物標本の基礎はジャマイカ滞在中にスローンが収集した8巻に及ぶ標本であり、それにフランスや英国で収集したものや文通相手から送ってもらったものが加えられた。その後、スローンは寄贈や購入によって大きなコレクションを入手した。そのなかには、ライデン植物園 (the Leiden Garden) 教授のハーマン・ブールハーフェ³¹ (Herman Boerhaave) が1685年から1693年にかけて植物園で収集したコレクションも含まれていた。スローンは1702年に遺贈によって友人のチャルトンのコレクションを入手したが、その時に2,500ポンドにもものぼる相続の一部も支払ったと思われる。1710年のレナード・プルケネット³² (Leonard Plukenet) の死後、スローンは彼のすばらしいコレクションを購入した。それには、アフリカやインド、日本、中国で収集された8000もの植物の23巻に及ぶコレクションも含まれていた。ポーフォート公爵夫人は、チェルシーとバドミントンの庭で育成していた植物の標本12巻をスローンに残して1714年に死んだ。スローンは公爵夫人について、「病気になったり元気がなくなった植物を小さな温室のようなところに移動させ、適切な指示を与えて面倒をみていた。これは夫人のコレクションをハンプトン・コート (Hampton Court) やそのほかの植物園よりも完璧なものにした」と書き残している⁽¹⁸⁾。翌年、アダム・バドル師 (the Reverend Adam Buddle) は自身が選んだ英国の植物の標本13巻をスローンに残した。

スローンのコレクションのうち最も重要なものは、日本で収集されたエンゲルベルト・ケンペル³³ (Englebert Kaempfer) のコレクションであろう。1716年、ケンペルの死後、スローンは彼のコレクションを購入した。その2年後、スローンは裕福な薬剤師のジェームズ・ピッティバー³⁴ (James Petiver) が所有していた博物館と約100巻にも及ぶ植物標本を入手した。このコレクションには、ヨーロッパ、北アメリカ、アフリカ、近東、インド、東洋の植物が含まれていた。1722年、スローンはマーク・ケーツビー (Mark Catesby) による北アメリカと西インド諸島への収集旅行を経済的に援助した。ケーツビーは、「事業の成功」を「偉大な博物学者で科学の推進者である」スローンに帰している⁽¹⁹⁾。ほぼ同時期に、スローンがチェルシー薬草園の長官に推薦したフィリップ・ミラー (Philip Miller) が薬草園で育成されていた植物の標本12巻をスローンに送ってきた。スローンは、1723年に亡くなったフランツ・キガラー (Franz Kiggelaer) のコレクションをオランダのオークションで購入した。その14巻のコレクションは、インド、日本、喜望峰、北アメリカ、西インド諸島産の植物を含んでいた。フィラ

デルフィアのジョン・バートラム³⁵ (John Bartram) は、1742年と1743年に収集した植物2巻をスローンに送った。スローンは自分の著作『ジャマイカの自然史』と彫刻が施された銀のカップを返礼としてバートラムに贈った⁽²⁰⁾。

スローンは広範囲に収集しただけではない。資料の保存と正確な記録のために博物館の必要性を痛感していた。彼は部分的にできあがっている自著『ジャマイカの自然史』第2巻の発行が遅れていることについて、「珍奇なもののある順序に従って並べること、番号を付すこと、名称を記録すること、加えて保存や使用法についての報告書が必要である」ため遅れていると謝罪した。特に問題が多かったのはピッティバーのコレクションを入手した時であった。スローンはこう書いている。

彼(ピッティバー)は非常に苦勞して文通相手や知人を通じて英国の自然物を収集した。世界中から集めたコレクションは空前のものであり、だれも成し遂げたことがないであろう。ただ、コレクションを維持するために適切な管理をしなかった。単に積み上げ、時折小さなラベルをつけていただけである。埃や塵、雨、虫などによって劣化していたので、即刻対処しなければならないことがわかった。(中略) 動物物質はほとんど破壊されてしまうので、最初に処置しなければならない。混乱の中からこのコレクションを見つけ出した時、現在も今後もできるだけの処置をしようと決めた。(中略) 損なわれてはならないものであるが、ピッティバーの思い出と私自身の評判に対して正しいこと、つまり、大衆の利益のため保存しつつ、公開しなければならない⁽²¹⁾。

スローンは、8巻の四つ折の本と38巻の二つ折りの本として自分のコレクションのカタログを持っていた。自分自身で多くの仕事をするに誇りを持っていたが、補佐してくれる人間を雇わなければならなかった。チューリヒ出身の若者ヨハン・ガスパー・ショイヒツェル(Johann Gasper Scheuchzer)は1722年にロンドンへ来て、コレクションに取り組み、スローンの家で生活していた。スローンはショイヒツェルの医学の勉強を指導し、王立協会会員に選ばれるように手配したが、彼は1729年に死んだ。ショイヒツェルの後を継いだのは、ライデンで医学を修めたクロムウエル・モーティマー(Cromwell Mortimer)である。彼は1729年ごろスローン邸の近くに住んでおり、スローンの秘書兼補佐役として活動した。スイスのシャフハウゼン(Schaffhausen)出身のヨハン・アンマンは1730年に植物標本の整理を手伝うためスローンの下へ来たが、植物学の教授として1734年サンクトペテルブルグへ赴任した。その後、ジョン・ホーキンス(John Hawkins)が秘書としてスローンの下で働き、ジェームズ・エンプソン(James Empson)は1742年ごろ保存担当学芸員となった。スローンはエンプソンに遺産を残して、コレクションの管財人に任命し、コレクションの整理が終わるまでエンプソンに年100ポンド支払われるように手配した。

1725年出版の『ジャマイカの自然史』第2巻において、スローンは自分のコレクションの財産目録(次頁)を作成した。それは彼の死後の1753年に指定遺言執行者に送られたリストと比較することができる⁽²²⁾。

ハンス・スローンのコレクションの財産目録（数字は点数）

	1725年	1753年
土壌・塩	536	1,035
瀝青・硫黄・琥珀・竜涎香	249	399
金属・鉱物	1,394	2,725
滑石・雲母等	169	388
水晶・非金属鉱石・蛍光性水晶	1,025	1,864
燧石・石・特異な化石	730	1,275
貴重な石・瑪瑙・碧玉石・大理石	1,394	2,256
珊瑚・珊瑚の同族・海底動物	804	1,421
野菜・根・木・果実・種子・ゴム・樹脂・濃縮液	8,226	12,506
ヨーロッパやマデイラ諸島、アメリカで収集した200以上の大規模な植物の乾燥標本とマレット博士やプルケネット博士、ピッティバー氏など有名な好奇心あふれる人々のコレクション	200	344
昆虫	3,824	5,439
有殻アメーバや貝とその器官（陸海で発見された天然物や化石）	3,753	5,843
ウニとその器官（陸海で発見された天然物や化石）	486	659
甲殻類・蟹・イセエビ等	263	363
ヒトデ類	—	176
魚類とその器官	1,007	1,555
星彩石類	183	241
鳥類とその器官	568)	1,172
卵	185)	
四足動物とその器官	1,194	1,886
毒ヘビ・ヘビ等	345	521
すなわち腎臓や膀胱等の結石、または解剖学的な生成物	507	756
上述のようなものを含まない雑多なもの（天然物や人工物）	1,169	2,098
古代の慣習や遺物、つば、道具等に関するもの	302	1,125
大型印章	81	268
自然史関連の絵画	319	471
数学的道具	54	55
瑪瑙・碧玉・紅玉・水晶製の大型容器・ひしゃくなど 他にカメオやアザラシの牙や骨製のもの	441	約542
		700カメオ
サマリア製・ギリシャ製・ローマの執政官のメダルなど古物、 現代のもの、コインや金属	20,228	32,000
細密画や彩色された本、植物・昆虫・鳥・魚・四足動物の素描 とその他珍しい天然物や人工物	136	347
印刷物	—	約 50,000
医学や自然、旅行に関する原稿	2,686	3,516

スローンの最大の興味は医学と自然史にあったが、遠く離れた未開民族が使用している約350の「人工の珍しい物」も集めた。これらの多くはエスキモーを含む北部アメリカン・インディアン関連のものだったが、南アメリカや西インド諸島（スローン自身が収集したと思われる9点を含む）、アフリカ、東インド、ラップランド、シベリアで収集されたものもあった。これら民族学的資料は重要な位置を占めており、キャプテン・ジェームズ・クック³⁶ (Captin James Cook) のオセアニアとオーストラリア探検と、大英帝国の急速な拡大によって大英博物館に一分野を築き上げた。スローンのカタログに記されている項目の多くは今日では識別することができない。また、多くが紛失したりし散逸したりしてしまっただが、「インディアンの太鼓、バージニアにて収集」のように魅力あるものも残っている。この太鼓はガーナのアシャンティ地区 (the Ashanti of Ghana) においてよく見かけるものであり、黒人奴隷が作ったものであろうと思われる⁽²³⁾。

大規模なコレクションを拡大、保存することに加え、スローンは研究を第三の博物館機能とした。王立協会に勤め始めた駆け出しの時でさえ、スローンは植物や鉱物などを例会に持ち込んでいた。ある時には女性の尿道から出てきた結石（長さ11cm、径14cm、重さ85g）を持ってきたこともあり、別の時にはアフリカ北部バーバリのサンタクルーズ (St. Cruz in Barbary) で収集された大きなサソリを持ってきて、アルコール浸けにして王立協会の収蔵庫にしまっておくようにいわれたこともあった。コレクションに対する計り知れない興味が、スローンに本や論文を書かせたり、また世界中の博物学者と意見を交わしたり、自然史に関する一般人からの問い合わせにも解答したりする力の源となっていた。スローンは研究者を歓迎し、自分のコレクションを見せて自由に研究させていた。迅速に資料を貸し出しており、特に本や植物標本シートに関してはすばやく対応していた。スローンは、時々、博物館学芸員が陥る古いジレンマと戦わなければならなかった。「自分が研究中の資料を貸し出すべきなのだろうか」と。熱心な植物学者ウィリアム・シェラード博士 (Dr. William Sherard) がスミルナ³⁷ (Smyrna) 領事を務め終えて帰国した時、博士は約1720もの乾燥植物標本をブルケネットとピッティバーのコレクションから借りたがっていた。そのためスローンは標本を手配していたが、要求を拒否されたことがあった。しかし、結局標本を借り出せることになり、2人の緊張関係が緩和された⁽²⁴⁾。

スローンは公に自分のコレクションを展示しなかったが、精通した人々には常にコレクションを見せる用意ができていた。ジョン・イーヴリン (1691年)、ドイツのザカリアス・フォン・ウッフェンバッハ (Zacharias von Uffenbach) (1710年)、リンネ³⁸ (Linnaeus) の学生であるピーター・カーム (Peter Kalm) (1748年) などは、コレクションについて詳細に書き残している。ベンジャミン・フランクリン³⁹ (Benjamin Franklin) はスローンのコレクションを見て、アメリカの「石綿製の財布」を売った⁽²⁵⁾。ヴォルテール⁴⁰ (Voltaire François-Marie

Arouet) や作曲家のヘンデル⁴¹ (Geroge Frederick Handel) もスローンのコレクションを見に行った。ヘンデルはスローン所有の稀覯本の上にバターを塗ったマフィンを置いてスローンを怒らせたことがあった。当時28歳のリンネはブルハーフェの紹介状を携えて1736年にコレクションを見にやってきた。彼は特に植物標本に興味を持っており、いくつかの標本を褒めたが、自分の恩師に「スローンの膨大なコレクションはどうしようもない混乱状態にある」と書き送った⁽²⁶⁾。リンネのその発言によって、スローンのコレクションはリンネ式二名法のように系統的ではなく、経験的に分類されていたことがわかる。1748年には英国皇太子と皇太子妃（後のジョージ三世の両親）がコレクションを見学し、年老いたスローンにやさしく話しかけた。特に皇太子妃が「国内でこれほど立派なコレクションを見ることのできることは、どれほど喜ばしいことでしょうか。今後の研究、私たちの子孫の利用に、また、どれほどの名誉を英国にもたらすのでしょうか」と言ったことでスローンは、とても幸せな気分になっていた⁽²⁷⁾。

スウェーデンのピーター・カームは2回もコレクションを見に来て、2時間もスローンと話し込んだ。博物館に特別な興味を持っていた学生であったカームは、例えば展示について次のように書き残している。

[昆虫が] 保存されている箱の上と下にはガラスがはめ込まれているため、中の昆虫をよく見ることができた。こういったケースや箱はくっつけて置かれているので、害虫が侵入したり、ダメージを与えたりすることができないようになっていた。箱の側面は木製であったが、ふたと底は両方ともガラスであり、たいていはふたがガラスであった。ガラスは木箱としっかり接合されているか、紙を用いて接着されていた。ガラス底の場合、昆虫は底の部分の真ん中に固定されていた⁽²⁸⁾。

機知に富んだカームは、スローンとそのコレクションを相当楽しんだようである。スローンはアレクサンダー・ポープ (Alexander Pope) の避暑用洞窟のために北アイルランドのジャイアント・コーズウェイ (the Giant's Causeway) で収集された二つの石を贈ったことがある。ポープは自作の短詩で「ミード (Mead) には本を。スローンには蝶を」と詠んでいる⁽²⁹⁾。ポートランド公爵夫人 (the Duchess of Portland) は、「スローン卿のコレクションを見に行った。系統だったコレクションではないが、自分自身で収集した珍しいものもコレクションに含まれていた」と書いている⁽³⁰⁾。

最も面白いことは、おそらくスローンの理髪師だったジェームズ・ソールター (James Salter) が、1695年にチェルシーのドン・サルテロのコーヒー・ハウス (Don Saltero's Coffeeshouse) に設置した喜劇博物館であろう。スローンはソールターにフランクリンから得た石綿財布のようなものを貸したと思われるが、ソールターはほとんど自前で資料をそろえた。例えば、「ポンティウス・ピラト⁴² (Pontius Pilate) の妻の使用人の妹の帽子」などである⁽³¹⁾。ソールターはコレクションの模擬カタログを刊行し、へたくそな詩で次のように書いている。「すべての種類の怪物を見ることができる。そんな怪物が育った環境にあったヘンなもの。シ

バの女王の遺品。また有名なボブ・クルーソー⁴³ (Bob Crusoe) が残したもの」⁽³²⁾。

これらの記述についての重要な点は、王室、有名人、研究者、コーヒー・ハウスの客、通りがかりの人など、スローンのコレクションは英国中に知れ渡っており、公共の博物館にコレクションが移管される時期に来ていたということである。また、当局も一般市民もコレクションに対しては好印象を持っていたのである。

4. 大英博物館の設立

ピーター・カームが1748年にチェルシー・マナーを訪問した時、88歳のスローンは、「耳が遠くなっていたため叫ばなければならなかった。舌が腫れているようでスローン卿はとてもゆっくりと話したが、言語は不明瞭であった。言葉を発するまでに長い時間がかかった」と書いている⁽³³⁾。スローンは庭に出るため車椅子を押してもらっていたが、王立協会への関心は持ち続けていた。博物学者ジョージ・エドワーズ⁴⁴ (George Edwards) はスローンに最新ニュースを伝えるため、毎週スローン邸を訪問していた。年老いたコレクターは、ますます衰弱し、1753年1月2日、93歳で生涯を終えた⁽³⁴⁾。

スローンは長い間、コレクションの将来について考えていた。最初の遺書は1739年10月9日、ブルームスベリーからチェルシーへ移る前に作成された。その遺書の中でスローンはコレクションについて次のように書いている。

神の栄光には幾つもの顕れ方がある。無神論に対する論駁とその結果、医術の進歩と利用、他の芸術と科学、そして人類への恩恵。これらのことはロンドン、つまり私が邸宅を所有した場所に残り、また、離れ離れにされないように願う。そして、多くの人々が利用してくれることを祈る⁽³⁵⁾。

スローンは遺言執行人に次のように指示した。コレクションを国家のため国王に20,000ポンドで購入してくれるように依頼すること。売却した20,000ポンドはスローンのふたりの娘、ハンプシャー州ポルトンのジョージ・スタンリー (George Stanley of Paultons in Hampshire) の妻となっているサラ (Sarah) と、オークレーのチャールズ・カドガン卿 (Charles, Lord Cadogan, of Oakley) と結婚したエリザベス (Elizabeth) に支払われること。仮に国王がスローンの死後6ヶ月過ぎてもコレクションの購入を決断しなかった場合、同じ条件で王立協会、オックスフォード大学 (the University of Oxford)、エジンバラ医学大学 (the College of Physicians at Edinburgh)、そして、パリ、サンクトペテルブルグ、ベルリン、マドリッドの各科学アカデミーへ売却を提案するようにスローンは指示した。これらの機関には、コレクションを取得すべきか否かを決定するために一ヶ月の猶予が与えられた。どこも条件に同意しない場合、コレクションはオークションにかけられることになっていた。スローンは、自身のコレクションを国外に流出させるとにおわせることで、政府が条件を呑むことを期待していたのであろう。

1749年7月10日付の遺言補足書では、最初の遺言書にやや変更が加えられた。チェルシー・マナーに完全な状態で保存されているコレクションは、約50人の著名人が引き受けた管財人委員会に預けられることになった。また、管理権限を持つ人々には、スローンのコレクションを見学した国王を含む国家の重要人物30人が指名された。1750年と1751年の追加遺言補足書では、最終的にチェルシー・マナーと土地をふたりの娘に残すことにしている。遺言補足書では、影響力と重要性を併せ持つ人々を管財人に指名することで、国家がコレクションを受け入れる可能性をより大きくするねらいがあったのであろう。スローンが以前考えていたように、コレクションに邸宅と土地を含めるといことは、チェルシー以外の場所での公開を望む人々に難題をもたらした⁽³⁶⁾。

遺言の執行者に指名されたカドガン卿 (Lord Cadogan) とハンス・スタンリー (Hans Stanley) のふたりはスローンの孫、ウィリアム・スローン (William Sloane) とチェルシーの教区牧師スローン・エルズメア (the Reverend Sloane Elsmere) のふたりはスローンの甥、ジェームズ・エンプソンはコレクション管理人であった。この5人は、1753年1月27日に管財人委員会を招集し、30人以上の委員が出席した。王立協会会長のマックルズフィールド伯爵 (the Earl of Macclesfield) が議長を務め、委員会は国王に対して請願書を提出することを決定したが、国王はこの請願に対して乗り気ではなく、資金をどこから捻出したらよいのかを考えていた。また、2月10日に行なわれた管財人委員会では議会で直接訴えることを決定した⁽³⁷⁾。

ホレス・ウォルポール⁴⁵ (Horace Walpole) は、いつもの陽気な調子で管財人委員会についてホレス・マン卿 (Sir Horace Mann) に宛てた手紙を書いている。

貴殿は、私がどのようにトリガイの貝殻や胎児の管財人として時間を過ごしているか想像できないことでしょう。亡くなったハンス・スローン卿によって、私は彼の博物館の管財人に指名されました。この博物館は、国王、議会、ペテルブルグ、ベルリン、パリ、マドリッドの科学アカデミーに20,000ポンドでの売却を提示することになっています。スローン卿はコレクションを80,000ポンドと見積もりました。カバや片耳のサメ、ガチョウのように大きなクモが好き人間ならだれでも手に入れることができるのです。(中略) お金が世の中で最も価値あるものだと思う人々は、このコレクションを購入することはないでしょう。国王は、財務省が20,000ポンド捻出すとは思えないと言いつきました。我々は、哲学者、植物学者、古物愛好家、数学者など粹で賢い人間の集合なのです⁽³⁸⁾。

数人の管財人は議員であり、スローンの提示した条件を受け入れるような気持ちはなかったが、委員会が反対する人々を説得した。政府がコレクションを購入すれば、スローンの遺言によって組織された管財人委員会を解散して議会在が管財人任命権を保持することに合意したのである。しかし、遺言の基本的な方針を逸脱しないことも求められた。つまり、コレクションは原形のまま保持されること、「一般市民の利益と利用に供すること、自由な見学と調査ができること」である。また、スローンの遺言には反していたが、「一般市民の利用に有益で便利な方法を判断し、チェルシーのマナー・ハウスからコレクションをロンドンのシティーまたはウ

エストミンスター、ロンドン郊外に移動すること」を主張していた⁽³⁹⁾。3月19日、下院はジェームズ・エンプソンを呼び出し、コレクションが20,000ポンド以上、少なくとも80,000ポンドの価値があるかどうか質問した。エンプソンはスローンがコレクションに100,000ポンド以上費やした、と言っていたことを話し、また、コレクションを公共サービスに提供するとなると、年間400から500ポンド必要になると試算した。これは主任管理人に100ポンド、助手に200ポンド、石炭やろうそくに60ポンド、そして資料用アルコールに20ポンドという内訳である⁽⁴⁰⁾。

討論中、下院議長のアーサー・オンズロー (Arthur Onslow) は、すでに形成されている博物館・図書館にふたつのコレクションを加えようと提案した。ロバート・ブルース・コットン卿⁴⁶ (Sir Robert Bruce Cotton) や、ロバート・ハーレー⁴⁷ (Robert Harley) およびエドワード・ハーレー⁴⁸ (Edward Harley) によって収集された中世のチューダー王家の写本や公文書のコレクションである。議会は3つのコレクションを統合して大英博物館を設立する法案を可決し、1753年6月7日に国王の裁可を得た。大英博物館設立プロジェクトへの融資のために、300,000ポンドの宝くじが発行され、95,194ポンド9シリング2ペンスの売り上げを新博物館の理事会に委託した。このうち、20,000ポンドはスローンの娘に支払われ、10,000ポンドは先述したコレクションを収集したハーレーの相続人に、10,000ポンドはコレクション保存のため現在の博物館がある場所ブルームズベリーのモンタギュー・ハウス (Montagu House) を購入するために、10,000ポンドは建物の修理と維持に、44,000ポンドは国債に投資された。この予算では運営費として一年に1,320ポンドしか残されなかったが、1759年1月15日、大英博物館は一般に公開された⁽⁴¹⁾。

新たに任命された理事会が博物館と図書館のコレクション使用について新たな規則を設けたが、大英博物館は公費で運営されているため、研究や勉強に熱心な国民や外国人だけでなく、一般市民にも博物館と図書館の使用が認められた。博物館は土曜日、日曜日、クリスマス、復活祭、宗教上の休日以外、毎日午前9時から午後3時まで開館した。当時はチケットがなければ入館できなかった。チケットを入手するためには「名前、身分、住所」を記入した申請書を本人が入館に先立って直接提出する必要がある、後に主任ライブラリアンによって申請書が承認され、チケットが発行された。毎時間10枚までチケットが発行され、5人以上のグループはライブラリアンや助手の案内で見学しなければならなかった。本を読みたい者は前日までに書籍や写本を予約することが必要で、一日に特殊なコレクションから持ち出せる本の数は決められていた。見学者は説明やキャプションのない展示品を足早に案内された。しかし、重要なことは創立者が意図したように、大英博物館が学者と同様に一般の男女にも開放されていたということである⁽⁴²⁾。

スローンの残したコレクションは主として博物標本 (鉱物学、地質学、植物学、動物学) であったが、さらに遺物、民族学的資料、画像、コイン、メダル、書籍、写本なども含まれてい

た。開館後の数年間で、この分野のコレクションはたちまち増加した。自然史および民族学の資料は、キャプテン・クック、アーチボルド・メンジーズ (Archibald Menzies)、ジョゼフ・バンクス卿のような探検家や、広大な大英帝国の官僚からの寄付によって増加の一途をたどった。遺物に関しては、チャールズ・タウンリー⁴⁹ (Charles Towneley) のギリシャ・ローマ彫像やエルギン卿トーマス・ブルース⁵⁰ (Lord Elgin, Thomas Bruce) がアテネのパルテノン神殿から持ち帰った有名なエルギン・マーブルの購入などによって重要なものになっていった。また、エジプトやメソポタミアの目を見張るようなすばらしい資料がコレクションに加わった。例えば、ナポレオンのエジプト遠征によってもたらされたロゼッタ・ストーンなどの資料や、発掘によって発見されたアッシリアやバビロニアの遺物である。1824年には絵画部門が独立してナショナル・ギャラリーとして設立され、絵画の収集を停止したが、さほど問題にはならなかった⁽⁴³⁾。

しかし、一つの管理体制の下で国立博物館と国立図書館を運営することが多大なストレスをもたらすことになった。これら2つの文化施設の機能は大きく異なったものであり、また、用途も矛盾したものであったからである。まず第一に、図書館は構成や形態、サイズが大きく異なる博物館資料よりは非常に手軽に配置したり、整えたりすることのできるものを含んでいる。書籍や写本は一回につき一冊、個人的に利用されるが、例えば鳥の皮膚のような博物館資料は、同じような研究を行なっている数人の研究者の研究対象となっているのである。さもなければ、資料は展示されたり、解説がつけられたり、年齢や経歴の異なった市民に見てもらったりしなければならない。大英博物館の機能は、概して図書館に有利な傾向にあり、利用できるスペースや人員、予算などが不均衡なものになっていった。1756年の最初の部門は、書籍部門、写本部門、自然物と人工物の三部門であった。考古学部門は1807年まで、陶磁器および民族学部門は1921年まで設立されなかった。最高経営責任者が1898年まで主任ライブラリアンを兼ねていたため、同時に館長や主任ライブラリアンに就任した。図書館は優れた運営能力を発揮したアントニオ・パニッツィ⁵¹ (Antonio Panizzi) の下で本物の国立図書館となった。パニッツィは1831年に印刷物部門の管理官であったが、1856年から1866年まで主任ライブラリアンを務めた人物である⁽⁴⁴⁾。

長い議論の末、自然史部門は1880年から1886年の間にサウス・ケンジントン (South Kensington) の自前の建物に大英博物館 (自然史) (the British Museum (Natural History)) として移設され、自前の館長と理事会を持つようになった。民族学コレクションの展示は、1970年にバーリントン庭園 (Burlington Garden) へ移され、人類博物館 (the Museum of Mankind) と改名した。1973年、新しく大英博物館図書館⁵²が、大英博物館の主要部門として設置された。大英図書館には自身の理事会と館長が置かれているが、大英博物館から数ブロック離れたユーストン・ロード (Euston Road) へ移動することになっている⁵³。図書館が移設さ

れたら、現在の建物は主として遺物と民族学のコレクションを備えた博物館として使用されるであろう。人類博物館の資料は、今の一時的場所から戻ることになるであろう^{54 (45)}。

ハンス・スローンは、偉大な人物としてどこでも認められていた。内科医としてのスローンは、現代人の目には不十分に映るであろう。というのは、当時生理学や病理学、細菌学など存在しなかったからである。しかし、スローンは科学的な進歩の中に身を置き、鋭い観察力、固い意志、そして常識をもって、その時代の医療に浸透していた迷信と格闘していたのである。ペルー産キナ皮の使用と予防接種は、内科医として彼がどれだけ進歩していたかを示すものである。スローンには同時代の博物学者や植物学者よりもさらに独創的な精神が備わっていたであろう。自然資料を収集し、記録し、研究する疲れを知らない情熱や、コレクションや知識を喜んで他人と共有する心、また価値ある植物研究をサポートする寛大さと意気込みには、ただ感心するばかりである。

ハンス・スローン卿の大英博物館は、大規模な図書館と博物館の機能を備えた国立博物館のさきがけとなった。最後に、国立の研究図書館として、国立の自然史博物館として、そして国立の世界と英国の遺物と人類学の博物館として、当分の間、この3つがオリジナルの名前を保持していくことであろうと思う。新しい大英博物館は、例えばパリやニューヨークにあるような遺物を含んだ美術館のようなものではなく、例えばパリやニューヨーク、ワシントンにあるような民族学資料を含んだ自然史博物館のようなものとは異なった博物館になると思われる。また、ベルリン、ライデン、フィラデルフィア、メキシコ・シティーにあるような独立した各館自立路線をたどっていくと思われるのである。その長く、且つ多面的な歴史を通じて、スローンが設立した博物館は英国の栄光のひとつとなった。また、現代の文化的必要性や状況に正確に且つ効果的に応えていけるように発展している。

(原注)

- (1) スローンに関する卓越した参考文献が二つある。ゲビン・R・デ・ビア (Gavin R. de Beer) 『ハンス・スローン卿と大英博物館 (Sir Hans Sloane and the British Museum)』、エリック・セント・ジョージ・ブルックス (Eric St. George Brooks) 『ハンス・スローン卿：偉大なコレクターと彼の仲間たち (Sir Hans Sloane: The Great Collector and His Circle)』である。私 (著者：E.P.アレクサンダー) は、使いやすさ索引の便利さによりこれらの文献を両方とも広範囲に使用し、一次資料として引用した (この場合、調査を行なっている)。この引用についてはデ・ビアの26ページ参照。
- (2) John Ray, *The Correspondence of*, pp.191-192.
- (3) De Beer, *Sloane*, pp.30-31.
- (4) Hans Sloane, *A Voyage to the Islands*.
- (5) Hans Sloane, *Catalogus Plantarium*.
- (6) De Beer, *Sloane*, pp.193-194.

-
- (7) De Beer, *Sloane*, pp.72-73; Brooks, *Sloane*, p.88.
 - (8) Sloane, *Voyage to the Islands*, 1: Preface.
 - (9) Hans Sloane to Richard Richardson, London, November 20, 1725, in *Illustrations of the Literary History of the Eighteenth Century...*, by John Nichols and John Bowyer Nichols, 8vols.: 1:283.
 - (10) De Beer, *Sloane*, p.20.
 - (11) De Beer, *Sloane*, p.25.
 - (12) De Beer, *Sloane*, p.82.
 - (13) Brooks, *Sloane*, p.61.
 - (14) For Amman, see James Britten, *The Sloane Herbarium*, pp.82-83.
 - (15) David Murray, *Museums: Their History and Their Use, with a Bibliography and List of Museums in the United Kingdom*, 3vols. (Glasgow: J. MacLeHose 1904): vol.1; Alma S. Wittlin, *Museums: In Search of a Usable Future* (Cambridge, Mass.: MIT Press, 1970), pp.17-22, 39-53; Silvio Bedini, "The Evolution of Science Museums," *Technology and Culture* 6 (1965): 1-29; Mea Allan, *The Tradescants: Their Plants, Gardens and Museum, 1570-1662* (London: M. Joseph, 1964).
 - (16) Brooks, *Sloane*, pp.177-179.
 - (17) Britten, *Sloane Herbarium*, pp.7-8.
 - (18) Britten, *Sloane Herbarium*, p.34.
 - (19) Britten, *Sloane Herbarium*, p.111.
 - (20) All of these separate collections are described under their collectors in Britten, *Sloane Herbarium*.
 - (21) *Sloane, Voyage to the Islands*, 2: i, iv-v.
 - (22) Hans Sloane, *The Will of*, pp.33-36; Brooks, *Sloane*, pp.194-196. See also de Beer, *Sloane*, pp.160-161; Edward Edwards, *Lives of the Founders of the British Museum*, pp.297, 303.
 - (23) H.J.Braunholtz, *Sir Hans Sloane and Ethnography*, esp. pp.19-21, 27, 35.
 - (24) Thomas Birch, *The History of the Royal Society of London* 4:460-461, 548; de Beer, *Sloane*, p.59; Brooks, *Sloane*, pp.182-184; Britten, *Sloane Herbarium*, pp.176-177.
 - (25) Brooks, *Sloane*, p.192.
 - (26) Britten, *Sloane Herbarium*, p.11.
 - (27) De Beer, *Sloane*, p.134.
 - (28) De Beer, *Sloane*, p.130.
 - (29) De Beer, *Sloane*, pp.125, 129; Brooks, *Sloane*, pp.189-190.
 - (30) De Beer, *Sloane*, p.125.
 - (31) De Beer, *Sloane*, pp.127-128.
 - (32) Brooks, *Sloane*, pp.209-210; Edward Miller, *That Noble Cabinet*, p.26.
 - (33) De Beer, *Sloane*, p.137.
 - (34) Brooks, *Sloane*, pp.21-211, 213-214; De Beer, *Sloane*, p.139.
 - (35) Sloane, *Will*, p.3; Sir E. Maunde Thompson, "The Creation of the British Museum," *Cornhill Magazine* 92,

p.643; de Beer, *Sloane*, p.138.

- (36) Sloane, *Will*; Hans Sloane, *Authentic Copies of the Codicils Belonging to the... Will... of Hans Sloane*; Sir William Jardine, *The Natural History of the Pachydermes*, pp.83-92; Thompson, "Creation of the British Museum," pp.643-644; de Beer, *Sloane*, pp.138-139; Brooks, *Sloane*, pp.218-221; Edwards, *Founders of the British Museum*, pp.296-300.
- (37) Miller, *That Noble Cabinet*, p.42.
- (38) February 14, 1753; de Beer, *Sloane*, pp.144-145.
- (39) De Beer, *Sloane*, p. 147; Miller, *That Noble Cabinet*, p.44.
- (40) De Beer, *Sloane*, p.148.
- (41) Miller, *That Noble Cabinet*, pp.26-36, 44-54; de Beer, *Sloane*, pp.148-153.
- (42) Miller, *That Noble Cabinet*, pp.61-63, 68-70, 90.
- (43) Miller, *That Noble Cabinet*, pp.74-76, 96-107, 113-115, 131, 191-223.
- (44) Miller, *That Noble Cabinet*, pp.80-81, 134-135, 144-145, 151-166, 363, 365.
- (45) Miller, *That Noble Cabinet*, pp.239-244, 355-356, 358-362; "Government Commitment: New Building at Last," *British Library News*, no.28 (April 1978) : 1-2; *Museums Bulletin* 20 (January 1981) : 183.

(訳注)

- 1 クリストファー・モンク (Christopher Monck) 軍人・ジャマイカ総督 (1652-1688)
- 2 チャールズⅡ世付内科医
- 3 内科医 (1624-1689)
- 4 ロザムンド池はセント・ジェームズ公園内の小さな池で自殺の名所であった。
- 5 博物学者 (1627-1705)
- 6 植物学者・探検家 (1743-1820)
- 7 自然科学者・博物学者 (1809-1882) 進化論を提唱・『種の起源』著者
- 8 植物学者・旅行家 (1817-1911) キュー植物園園長・王立協会会長 (1872-1877)
- 9 作家・日記作家・園芸家 (1620-1706) ペスト大流行や清教徒革命を日記に残した
- 10 アカネ科の常緑高木であるキナの樹皮に含まれるキニーネは、アルカリ性の苦味のあるアルカロイドで、マラリアの唯一の治療薬であった。
- 11 1673年に薬剤師協会によって設立された。
- 12 チェルシー薬草園園長・設立者
- 13 化学者・物理学者 (1627-1691) ボイルの法則を発見。
- 14 フランスの植物学者・パリ王立植物園管理官 (1656-1708)
- 15 モンペリエ大学医学・植物学教授 (1638-1715) マグノリアの由来となった人物
- 16 牛痘種痘法はジェンナーが1796年に発明した。
- 17 ジョージⅡ世の妻、ドイツ人 (1683-1737)
- 18 スイス人医師 (1669-1730)

-
- 19 軍人・慈善家 (1696-1785) 1733年にジョージア植民地を設立
 - 20 イギリス女王 (1665-1714：在位1702-1714)
 - 21 デンマーク王クリスティアンV世の弟ゲオルグ公 (1653-1708) アン女王の夫
 - 22 イギリス国王 (1660-1727：在位1714-1727)
 - 23 ジョージII世の妻 (1683-1737)
 - 24 イギリス国王 (1683-1760：在位1727-1763)
 - 25 日記作家・海軍大臣 (1633-1703) 『ロンドン大火』や『ペスト大流行』日記の著者
 - 26 哲学者・社会契約論者 (1632-1704)
 - 27 古生物学者 (1665-1728)
 - 28 詩人・評論家・医師 (1667-1735)
 - 29 父：園芸家・植物学者 (c.1570-1638)、子：園芸家・植物学者 (1608-1662) ふたりともチャールズ三世の主任園芸師であった。
 - 30 古物収集家 (1617-1692) アシュモリアン博物館設立者
 - 31 オランダの物理学者・植物学者 (1668-1738)
 - 32 博物学者・収集家 (1642-1706)
 - 33 ドイツの医師・博物学者 (1651-1716) 1690年から2年間、長崎の出島に滞在し、1691年と1692年に江戸へ参勤し、徳川綱吉に謁見した。
 - 34 植物学者・昆虫学者・薬剤師 (1658-1718)
 - 35 アメリカの植物学者・ジョージIV世植物学者 (1699-1777)
 - 36 探検家・海軍軍人 (1728-1779)
 - 37 イズミル (Izmir) の旧称
 - 38 スウェーデンの生物学者・博物学者 (1707-1778) 分類学の父
 - 39 アメリカの政治家・物理学者・気象学者 (1706-1790)
 - 40 フランスの哲学者・作家 (1694-1778)
 - 41 ドイツ生まれの作曲家・ジョージI世の宮廷音楽家 (1685-1759)
 - 42 ローマのユダヤ総督
 - 43 ロビンソン・クルーソーのことだと思われる
 - 44 博物学者・鳥類学者 (1693-1773)
 - 45 政治家・作家 (1717-1797) 英国首相ロバート・ウォルポール (Robert Walpole) の息子
 - 46 政治家・古物収集家 (1571-1631) 修道院の解散によって散乱した書籍や原稿、コインを収集。1629年に逮捕され蔵書を没収されるが、息子のサー・トーマス・コットン (1594-1662) が取り戻して蔵書を追加。コレクションを大きくする。曾孫サー・ジョン・コットン (1679-1731) は1700年にコレクションを国へ寄付した。現在大英図書館蔵。
 - 47 初代オックスフォード伯、古物収集家 (1661-1724) 写本等を収集
 - 48 二代オックスフォード伯、古物収集家 (1689-1714) 父ロバートと共に写本等を収集
 - 49 考古学者 (1737-1805) 彼のコレクションは28,000ポンドで大英博物館に買い取られ、ギリシャ・ローマ部

門の基礎となった。

- 50 外交官（1766-1841）オスマン帝国大使（1799-1803）時代にバルテノン神殿の大理石彫刻を英国に運ぶ。1816年にこれらの彫刻は政府によって購入され、大英博物館に寄託、展示された。
- 51 イタリア出身（1797-1879）1831年から大英図書館に勤める
- 52 現在の大英図書館レファレンス部門
- 53 1998年に移動し開館
- 54 人類博物館はすでに閉鎖され、大英博物館に戻っている。

*2004年9月21日に著作権を保持している出版社AltaMira Press から訳者に対してEdward P. Alexander著『Museum Masters -Their Museums and Their Influence』内の「2 Sir Hans Sloane and the British Museum」(p21-42)の翻訳が文書で許可されている。

【参考文献】

- 朝日新聞社編 2003『創立250周年記念 大英博物館の至宝展』図録 朝日新聞社
クリスタル、D. 編（金子雄司・富山太佳夫：日本語編）1997『岩波＝ケンブリッジ世界人名辞典』岩波書店
藤野幸雄 1975『大英博物館』岩波書店
松居竜吾・小山騰・牧田健史 1996『達人たちの大英博物館』講談社
ウィルソン、D.M.（中尾太郎訳）1994『大英博物館の舞台裏』平凡社

【参考Web Site】（すべて2004年8月検索）

- Chelsea Physic Garden <http://www.chelseaphysicgarden.co.uk/>
Hunt Institute, Carnegie Mellon university: Online Exhibition: Order from Chaos
<http://huntbot.andrew.cmu.edu/HIBD/Exhibitions/Online.shtml#Order%20from%20Chaos>
Museum of Garden History: The Tradescants <http://www.cix.co.uk/~museumgh/tradescants.htm>
National Portrait Gallery/search the collection <http://www.npg.org.uk/live/search/>
The British Museum: History of the BM <http://www.thebritishmuseum.ac.uk/visit/history.html>
The Natural History Museum: About Hans Sloane
<http://www.nhm.ac.uk/botany/databases/sloane/hansslope.htm>